

## 稲盛経営哲学における美意識の問題

伊藤 幸男〔名古屋経済大学教授〕

### Problem of sense of beauty in Inamori management philosophy

ITO Yukio [Professor, Nagoya Keizai University]

キーワード：稲盛経営哲学、美意識、転生輪廻、二宮尊徳、救世

#### 1. 稲盛経営哲学の全体像

経営哲学というものを考える時、私は木、樹木、をイメージします。大地から伸びる幹があり、そこから大小の枝が張り出し、枝の先に葉が生い茂る。そういう木をイメージします。その木には花が咲き、花はやがて果実となる。果実は企業の利益です。

その実をつけるために、幹と枝は地中から水と養分を吸い上げ、葉は太陽の日をいっばいに受けて光合成をしてでんぷんを作り、実にためる。

枝と葉は経営の技術の一つひとつでしょう。幹は企業の理念であり、戦略でしょうか。企業理念と戦略がしっかりしたものであれば、幹はでっかく、高く伸び、無数の枝と葉を生い茂らせることが出来る。どんな嵐にも揺るがない。何百年も千年を超えてでも生き続ける。そういうイメージがあります。実際、千年を超える企業がわが国にはあります。

しかし、じつは、大地の中には根が広がっています。大木の根は太く、大きく深く広がっていることでしょう。

私は、根は、哲学、人生哲学だろうと思います。それは地中に隠れて見えません。しかし、幹を支え、枝と葉に養分を送り続けている。根が枯れたら、大木も枯れます。

経営哲学は、単なる技術の集積ではない、見えにくいかもしれないが、哲学・人生哲学に支えられているものだろう、そう思っています。稲盛和夫氏の経営哲学を学んで、そういうふう考えるようになりました。経営哲学は狭く言えば、戦略・戦術の領域のものでしょうが、実は何らかの哲学・人生哲学を基層にもっている、そこまで含んだものとして考えた方がいいだろうと考えています。

経営学の教科書などを読むと企業理念の重要性について説かれていることがあります。学ぶことは多いですが、ただ、人生哲学についてはあまり書いてありません。そういう印象があります。まあ、常識的な人生哲学を前提にしているということだろうと思います。

稲盛氏の経営姿勢を拝見して痛感することは、経営理念を非常に大事にされるということ、それを枝の1本1本まで、葉の1枚一枚にまでいきわたらせようとしておられることです。

稲盛経営哲学の別名を、京セラフィロソフィといますが、それを詳しく語ろうとすると600頁にもなる分厚い本『京セラフィロソフィ』（盛和塾事務局発行）になります。そ

れは、枝の1本1本まで、葉の1枚1枚までいきわたらせたいという、執念があるからだと思います。そこに意味があります。稲盛氏にとって、経営理念とは額に入れて社長室に飾っておくようなものではない、一人ひとりの社員が、日々の仕事の場で、ありとあらゆる瞬間に、それに依拠する、依拠すべきものなのです。私はしばしば稲盛氏を、あたかも求道者のようと言いますが、それはその執念を感じるからです。

経営理念というのは大体どこの会社にもあるようです。会社案内を見れば、書いてあります。普通はごく短い言葉で書いてあります。京セラの理念も非常に短いです。こうです。

「全従業員の物心両面の幸福を追求する」

もうひとつの柱があります。

「人類、社会の進歩発展に貢献すること」

これだけです。

簡単なものです。額に入れて飾りたいならちょうどいいかもしれません。

しかし、そこに込められた思いを徹底的に追求し、徹底的に実践しようとする、ぶ厚い本になるということです。これはちょっと額に入れて飾るわけにはいきません。理念は実践のためにあるものだからということがそこに現れているということでしょう。そこが一番重要なところかもしれません。

この理念が生まれるには特異な背景がありました。「若手の反乱」というものです。京セラ創業から三年目の春のこと、毎日のあまりの激務にたまりかねた若手の社員達が退職覚悟で労働条件の改善等を稲盛氏に迫るといった事態が起きました。稲盛氏は彼らの気持ちはよく分かったのです。ですが、会社は安易な答えを出せる状況にはまだなっていませんでした。三日間のひざ詰交渉の末、ようやく彼らを説得したのですが、その時稲盛氏は心中深く感じるところがありました。社員に対する責任の重さということです。

長い煩悶の末、氏は一つの結論に到達しました。会社はそこに働く全従業員の幸せを実現するものでなければならないということです。会社は稲盛ひとりのためのものであってはならないことを悟りました。京セラは稲盛和夫の技術を世に問うという意味で出発したものでした。氏自身も初めはそう考えていました。しかし、そうではいけないと悟ったのです。自分ひとりのロマンを追求するための手段であってはならなかったのです。これが非常に重要な背景です。

つまり、稲盛氏にとって、企業理念というのは悟りなのです。人生の意味がそこにあるということです。自分の人生そのものと言ってもいいでしょう。だから、ゆるがせにできない。本を読んで作ったようなものではない。研修会で教えられて、かつこよさそうだから、と決めたものではない。深い反省と新しい生き方を凝縮するものだった。そういうことだったろうと思います。

全従業員の幸せを実現する、それも単に物的な面だけでなく、心の面においても幸せでなければならない、また、人類の進歩のためにもなる、そういう会社をどうしたら作って行けるか、長い長い模索、探求がこの時から始まりました。

稲盛氏は経営学など学んだことはなかった。学ぶ暇もなかった。来る日も来る日も粉まみれになって、朝は朝星、夜は夜星を仰ぎながら働く日々でした。その時依拠したものが、

人間として正しいことを徹底的に貫くということでした。

「人間として正しいこと」とはどういうものでしょうか。それは特に難しいものではありません。例えば古来、公平、公正、正義、努力、勇気、博愛、誠実というような言葉で表されてきたような徳目があります。あるいは、嘘をつかない、騙さない、正直である、まじめである、誠実である、一生懸命である、思いやりがある、やさしい心、親切である、前向きで建設的である、感謝の心を忘れない、欲張らない、・・・そういう古来から試されずみのあり方があります。稲盛氏はそれを徹底的に追求してきたのです。

これらの徳目自体は誰でも知っていることでしょう。「哲学」というとつい難解なものを思い浮かべると思いますが、稲盛経営哲学は、見かけ上はそういうものではありません。しかし、どうでしょうか。実践は至難ではないでしょうか。日常生活でも至難でしょう。まして、生き馬の目を抜くような厳しい競争の行われる商売の世界では不可能だと思われるのではないのでしょうか。

しかし、稲盛氏はそれを愚直に追求してきました。追求してこられたと私は受け止めています。そこに嘘もごまかしも誇張もないと受け止めています。

人間として正しいことを愚直に追求して、高収益企業を作り上げて、大企業にまで育て上げた。そういうことが出来るということ、それは驚きです。

大企業というのは沢山あります。商才に長け、経営の技に優れていれば大企業を作ることは出来るのでしょうか。そういう傑出した能力にあふれた方はおられます。しかし、そこだけで驚くということは、私の場合にはありません。私は、人間として正しい生き方を愚直に追求する、ど真剣に追求する、そういう生き方に惹かれるからです。

## 2. 手の切れるような製品を

稲盛経営哲学を学び始めた頃感じたことの一つに、稲盛和夫という方には強い美意識があるなということでした。美意識というものは誰にでもあるものかもしれませんが、それは通常着る物とか持ち物とか住まいとか車とか、身の回りの生活備品に現れるくらいで、仕事とか経営のあり方にまで表れるものだとは思われないかもしれません。もちろん、芸術的な活動、それを行う人には美意識があるでしょう。しかし、経営者に、経営上のことで強い美意識があるとまでは思っていないでした。

経営者にも経営上の問題で美意識があるということは稲盛氏だけには限らないのかもしれませんが、そういう経営者は多いのかもしれませんが。そこは多分そうだろうと推測しますが、ここでは一般論はやりません。そこまでの準備がありません。ここでは私が感じた限りでの稲盛氏という偉大な経営者における美意識の問題を論じてみたいと思います。

稲盛氏の美意識に関するエピソードについては、いろいろな機会に聞いたことがあるのですが、ここでは先述の『京セラフィロソフィ』（盛和塾事務局発行）によりつつ論じましょう。『京セラフィロソフィ』にこういう記述があります。

「私たちがつくる製品は『手の切れるような製品』でなくてはなりません。それはまささらなお札のように、見るからに鋭い切れ味や手ざわりを感じさせるすばらしい製品のこ

とです。」(549頁)

刃物を見て、触れば手が切れるだろうとは誰でも思うものですが、ここで言われているのはそういう表面的なことではありません。何かもっと深い、製品に込められた魂のようなものがあって、それがどうしようもなくにじみ出て、見る人に感動を与えるという、そういう次元のことです。実際、こう続けられています。

「製品にはつくった人の心が表れます。ラフな人がつくったものはラフなものに、繊細な人がつくったものは繊細なものになります。」(同)

どういうことでしょうか。

稲盛氏はある経緯を語っておられます。

ずっと以前の、半導体用のパッケージをつくるための研究開発を進めていた時の話です。京セラのある技術者がリーダーとなって研究開発に取り組んでいました。

今では研究開発は大いに進み、非常に複雑・高度なものになっているようで、そういう技術の内容に疎い私には半導体パッケージについて説明されているものをいろいろ読んでもなかなか分かりかねるところがありますが、半導体パッケージの設計技術が電子機器の死命を制するほどであると言われていました。

そういう極めて重要な研究開発だったのですが、当時は誰も経験したことのないほど大変過酷な作業でした。開発には想像を絶する苦勞と長い時間がかかったそうです。そうした苦勞の末ようやく出来上がりました。リーダーの方はサンプルを稲盛社長のところへ見せに持っていきました。きっとよくやった、ご苦勞さんという言葉に期待していたに違いありません。ところがです。

稲盛社長から出た言葉は、「これでは駄目だ」というものでした。

リーダーの方は予想に反する言葉だったので、「なぜですか。特性は全部満たしています」と言い返しました。

特性というのはその製品に求められる条件ということですね。それは満たされていたから、製品として出来上がっているはずだ、駄目というのはおかしいというのがリーダーの考えだったのでしょう。普通はそうかも知れません。

ではなぜ稲盛社長は駄目だと言ったのかということ。ここに稲盛氏の美意識が鮮明に表れていたのです。稲盛社長はこう言ったそうです。

「見てみる。薄汚れているじゃないか」

私には技術的なことはよく分かりませんが、半導体パッケージは窒素と水素の混合ガスの中で焼き固めて作られるそうです。酸素がないので、もし脂肪分などがわずかでも基板の上であれば焼き固める時にそれが炭化して製品が少し灰色がかったものになるのだそうです。稲盛氏にはそのわずかの色の具合で焼成時の問題が見えて、これは完ぺきな製品ではないと思われたのでしょう。稲盛氏は製品は完ぺきなものでなければならないという信念があり、それは製品に対する美意識でもあったのです。

リーダーにはそのことがにわかには理解できなかったようです。彼は稲盛社長に反発してこう言ったそうです。

「あなたも技術者なのだから、理論でものを言うはずでしょう。それなのに、薄汚いとはどういうことですか！薄汚いということと製品の特性とは関係ありません。感覚で判断

をするなんて、おかしいじゃありませんか」

社長に食ってかかるとは、そのリーダーの方もなかなか気骨のある方だったのかも知れませんが、やはり稲盛氏の美意識の意味するところがよく理解されていなかったということでしょう。稲盛氏が言うのは、単に見かけが綺麗かどうかではなかった。わずかと言えども変色があるということは、製造過程に何か問題があるということであって、変色はそれを教えているということでした。そういう色をするのが完ぺきを意味するのであれば、それは別にどうこう言うことではなかったでしょう。とはいえ、完ぺきな場合には見た目も美しくなるもののようなのです。稲盛氏は経験的にそのことを知っておられたということでしょう。

数学者でもない私がこういうことを言うのはおこがましい気はするのですが、中学・高校生の頃数学が非常に好きで数学の本を読んでいた時がありました。それ程高等なものではありませんでしたが、強く感じたことがありました。式は美しいということでした。と言いますか、正しい答えは美しいということでした。いつでしたか、『博士の愛した数式』という映画を観て、原作を読んで、オイラーの公式というものを知りましたが、美しいと思いました。

数学には限りません。

真善美です。

真なるもの、善なるものは美しい。

稲盛氏は技術者ですが、技術に美を求めた方であったかもしれません。いえ、優れた技術者だったからこそ美を求めたのではないかと思います。

稲盛氏はセラミックスを作っておられたわけですが、製品として完成するまでには長い工程があります。工程のどこか一つででもミスを行えば全てが駄目になります。

「つまり、製造の全工程において、たとえわずかコンマ何%というミスであっても、それまでの努力がすべて水泡に帰してしまいます。そういうことを、私たち物をつくる人間は経験してきているわけです。一瞬の気の休まる間もないくらいの完全主義を貫きパーフェクトを狙っていかなければならない。これがものづくりの世界です。」（146頁）

完ぺきを期すことが習性になっていたということですが、完ぺきなものは美しいものでもあるということを経験され、逆に、美しくないもの、と言いますか、美しさにおいて何か少しでも違和感がある場合には完ぺきではないということを経験されていたのでしょう。それは直感のレベルにまで高められていたのでしょう。

### 3. 人生の美

稲盛氏の美しいものを求めるという強い美意識、それは生活のすべての面に表れたように思われます。

経営においても表れました。

若い頃、稲盛氏は経理のことは初めはずぶの素人でした。簿記のことなど何も知りませんでした。それで、経理部長に根掘り葉掘り訊いていました。ところが、その時数字の間

違いが発見されたそうです。経理部長は消しゴムで消して書き直そうとした。

「私はその時、烈火の如く怒ったわけです。つまり、消しゴムで消して直せば大丈夫だと思っているようですが、それではいけません。すべての仕事において、少しでもミスがあれば取り返しがつかないことになる、そう思うくらい日々緊張して仕事をしなければならないのです。ですから、最後に数字が合えばいいという考え方は許しませんと、私は事務系の社員にも完全主義を要求しました。」(152頁)

しばらく前のことになりますが、社会保険庁の年金業務に膨大なミスが蓄積されていることが表ざたになりました。緊張感の欠如がこういう結果をもたらしていたのでした。

しかし、人様のことばかり言えないなども反省します。めったにないことなのですが、何年かに一度くらい、学生の成績記入にミスがあることがあります。今年度の前期末試験で一つありました。試験を受けて合格だった学生を「欠席」と記入してしまっていました。答案が他のところに紛れ込んでいて、「ない」と判断したためでした。後で学生から申し出があったので訂正できましたが、答案の総数を数えていたらミスは発見できていたはずでした。これは私の緊張感の欠如だったと思います。

稲盛経営哲学を学んでもこういうことが起こります。まだまだ、です。

完ペきを期するということが強い美意識にまで高まっていないということです。

美意識にまで高められることが大切です。

稲盛氏の完ペきを期する態度は非常に強い美意識にまで高まっていると思われれます。それを如実に示すエピソードがあります。

フランスのシュランベルジェという会社の社長、ジャン・リブー氏と語り合った時のことです。

シュランベルジェはベストを尽くすということをもットーにしていた。これに対して、稲盛氏は、パーフェクトでなければならないと考えていた。さあ、どうなんだ、という議論がえんえんと続いたそうです。そして、最後には、リブー氏も、これからはパーフェクトを目指そうということになった。稲盛氏はそのエピソードを語っておられます。(153頁～)

私は考えます。稲盛氏は確かに技術者として、ほんのわずかのミスでも全てが台無しになる恐ろしさを身に染みて知っておられる、だから完ペきを期すということが技術・経営の鉄則になっている。経過としてはそういうことなのだろう。しかし、全ての技術畑出身の経営者がそうであるかどうかは分からない。違うかもしれない。どうしてだろう、と。

そして、思います。稲盛氏においては、完ペきであるということは美意識にまで高められているからではないか、と。言い換えれば、マニュアルのようなものではない。こうすべきであると理屈としてあるものではない。つまり、外的なものではない。もっと内的なもの、心の奥底から湧き上がってくるような、そうでなければとても落ち着かないような、そんな強い思いではないか、と。

美意識というのはそういうことです。

稲盛氏における美意識は技術・経営の領域をも超えているように思われます。生き方そのもの、人生観全体にまで及んでいるかに思われます。

稲盛氏は心の美しさを追い求めておられるように思われます。心の美しさとは何でしょう。いろいろな言い方で表すことが出来るでしょう。正直であること、素直であること、感謝すること、思いやり深いこと、まじめであること、一所懸命努力すること、欲をはらないこと、謙虚であること、人のために何か役立ちたいと思うこと、などなど、いろいろな言い方で表すことが出来るでしょう。

稲盛氏は優れた経営者です。こう言ってよければ、カリスマ性がある方です。氏の弟子たらんとするものは全国・世界に何千人といます。多分、大金持ちでもあるでしょう。その氏がいつも言われます。

「死んでいくときに持って行けるものはただ一つ、魂だけだ。だから、少しでも美しい魂になってそれを持っていきたいものだ」

そういう趣旨のことを言われます（拙著『信念が未来をひらく 稲盛和夫の経営哲学に学ぶ』致知出版社、2010年、特に第7章参照）。

これは本心でしょう。

稲盛氏は心からそう願っておられるでしょう。

私はそれを少しも疑いません。

私は生きる意味をこう考えています。

(1) 能力の発揮・向上

(2) 心境の向上

この二つを螺旋的に追求することだ、と

この現世におけるすべてのことはこのための方便であり、舞台装置です。

例外はありません。

仕事もそうです。

人は仕事にいろいろな動機を見、いろいろな意味を付与しますが、結局仕事を通して能力を発揮した向上させています。それができれば喜びとなり、幸せを感じます。しかし、それだけではありません。心境を向上させています。必ずしも成功裏に向上させるとは限らず、落とす場合もありますが、落とせばそのつけは後で回ってくるでしょう。

ともあれ、こういう観点から見ると、稲盛氏の生き方は生きる意味を最高度に追求し、実現されたということが言えます。松下幸之助先生なども同じことが言えますが、稲盛氏もまったくそう言えます。

#### 4. 美の広がり・・・真なるもの、善なるもの

先に、真善美ということを行いました。真なるもの、善なるもの、それが美である、と。言い換えれば、美の追求は真実・真理の追究、善の追求でもあります。

この点においては、人によっては制約があり、ある部分と言いますか、ある程度のところまで留まるということが多いようですが、稲盛氏においては徹底しているかに思われ

ます。

氏は、人生の転生輪廻を認められ、神の存在をも認められていると思います。そして、そのことをはっきりと語られます。

稲盛氏を敬愛してやまない多くの人々も、ここに至って理解の歩みが止まるようです。唯物論的「常識」の壁を乗り越えるのが難しいからです。しかし、私はここに稲盛氏の真の偉大さを見ます。

唯物論の隆盛する我が国において、功成り名を遂げた偉大な経営者がこういうことを語るのは決して世間の称賛を浴びるものではありませんが、稲盛氏ははっきりと語られます。氏の強い美意識がそうさせるのではないかと思います。

私は稲盛氏の認識を正しいと考えるものです。私も転生輪廻を認めますし、神の存在を認めます。

神という言葉は多義的で、議論は尽きないことになるでしょうが、多分、稲盛氏のおっしゃる神と私が考える神とは同じでしょう。一言で言えば、宇宙に遍満する愛のエネルギーであるというものです。人間はその一分子であり、こう言ってよければ、神の子、ということです。

ですから、これは科学的な認識の問題なのです。

稲盛氏は得度されて、「大和」という出家名も持っておられますが、必ずしも仏教的ではありません。仏教的でないとも言いませんが、そこを超えておられると思います。これは私の解釈です。従来的な仏教は神をそういうふうには言わないのではないかと思うからです。今の仏教は転生輪廻も認めない、と言いますか、それが分からなくなってしまうように思うからです。

『般若心経』に、「色即是空、空即是色」という言葉がありますが、物質は非物質的なエネルギー（の満ちている真空）から生成する、また、その逆であるということだと思いますが、これは物理学が今後解明するはずの真理です。ゴータマ・シッダールタ（釈迦）はそのことをインスピレーションで把握しておられたと思いますが、今の仏教ではそれが分からなくなっているかもしれません。

つまり、私の言いたいことは、稲盛氏の認識力は今の仏教を超えているだろうということです。

しかし、氏は仏教に親近感を持っておられるようだから、それはそれで構いません。私ごときがどうこういう話ではありません。

人間は死んでも意識、魂と言ってもいいのですが、それは消滅しません。残るのです。残ってどうなるかというのはちょっと複雑な問題があるようですので立ち入りませんが、意識は残るのです。臨死体験現象とか、前世記憶を持つ幼児・子供の存在とか、自動書記・霊言現象とかいろいろ状況証拠はありますが、ともかく、肉体から分離した意識の存続というのは客観的な事実でしょう。好き嫌いの問題ではありません。万有引力の法則のような客観的問題でしょう。

しかし、見えないもの、検知できない（ように思われる）もの、そういうものは認めな



いという唯物論的観念がありますので、人は死んでも意識は残ると言うインテリは腰を引くでしょう。

宇宙に遍満する愛のエネルギー、神、などと言えばいっそう腰が引けるでしょう。

しかし、世の「常識」はどうあれ、転生輪廻も神の存在も真理だと思います。

そこから善の問題も起こってきます。

一体、善、とは何でしょう？

何をもって善とし、何をもって悪とするのでしょうか？

いろいろな議論はあろうかと思いますが、結局それは死後の生命、魂の存続をも認めなければ判断できないのではないのでしょうか。

よく言うでしょう？あんな極悪人がのうのうと生きて、あんないい人がなぜあんな不幸な目に遭うのか、と。

そういうふうに見えることもあるのですが、因果の摂理というのは死後の生命の存続をも考えに入れないと分からないのです。

善は死後の意識のあり方によって判断されるでしょう。そして言えることは、善なるものは美しいということです。善なる意識は美しい世界に還るとということです。

稲盛氏も因果の摂理の問題は長いスパンで考えなければならない、死後の生命の存続まで考慮に入れて考えなければならないとおっしゃっています。

真なるもの、善なるものは美しい。美の追求は真・善の徹底的な追求です。時にそれは勇気を必要とします。稲盛氏は徹底して真なるもの、善なるものを追求してこられました。そこに偉大な勇気を見るとともに、あくなき美意識の脈打っていることを感じます。

## 5. 二宮尊徳翁の報徳仕法と京セラフィロソフィ

二宮金次郎・尊徳翁について、稲盛氏はしばしば言及しておられます。内村鑑三先生の『代表的日本人』の監訳もしておられます。氏は尊徳翁に触れて、労働こそが偉大な人格を作るのだとおっしゃっています。今年（2011年）、1月の末に小田原の報徳二宮神社に行きました。2度目でしたが、そこで大きな気づきがありました。

尊徳翁は子供のころから働きに働いた人でした。長じて農村復興の指導者になっても、寝るのは夜中の12時、そして、もう3時か4時ころには起きて調べものをし、夜明けとともに村を回って指導に当たりました。勤勉という精神が人間の肉体をまとっている、まさにそういう人でした。

尊徳翁の教えの柱は、至誠、勤労、分度、推譲、と言われます。

分度というのは収入に応じた支出をするということですが、これが農村復興のカギでした。大名家ではなかなかこれが出来なかった。これをやるためには心を高めなければなりませんでした。

結局、尊徳翁の教えの本質は心を高めるということでした。推譲、つまり世のために尽くすということもそういうことでした。

尊徳翁は農村を復興することに全生涯を捧げ、それ以外のことには1分1秒たりとも使わなかったと言っていると思います。

その方法を報徳仕法と言いますが、その本質は心を高めるということだったと思います。

尊徳翁は農業という産業、農村という場で、物心両面の幸せを追求した方だったと思います。その技術的と言いますか、実務的な面は、実に緻密、正確で詳細な計算に裏付けられて、一部の曖昧さもない、合理的・科学的な手法でした。実情・実態を余すところなく調査し、把握する。復興事業を始めるまでは実に用心深く徹底的に考え抜き、いったん取り掛かる決心をしたら何があってもあきらめない、そういう方でした。

しかし、心を高めることを絶対的に重視しました。そのポイントは、感謝・報恩・積善、自力（自助・努力）、積小為大（小さなことを営々と積み重ねて偉大なことを成し遂げる）、因果律の認識、反省、利己主義の脱却と利他の精神の顕揚、これらでした。

非常に特徴的な点ですが、もし悪いこと、うまくいかないことが起こっているとしたら、自分の心にまだ何か足りないものがある、何か天地の理（ことわり）に照らして正しくないところがある、そこを正さなければならない、決して人のせいにはしない、そういうふうを考える方でした。そして、じっと潮の満ちてくる時を待ちました。

尊徳翁は自己犠牲精神の権化みたいな方でした。まあ、ご本人は別に無理してそうしているというわけではなかったでしょう。そうせずにはいられない、自分のことなんかそもそも関心がない、人の幸せだけにしか関心がない、だからそうしている、それをはたから見ると大変な自己犠牲に見える、まあ、そういうことだったと思いますが、こんな歌を残されています。

たのしみは木綿着物にめしとする

その余は我れをせむるのみなり

どうしても礼儀上必要な時以外には、木綿の着物を好む、食べるものは一汁一菜。それ以上のことをしたら、いたたまれない、そんな意味ですね。

私は尊徳翁のことを知れば知るほど、稲盛氏とまったく同じであるという感慨を持ちました。瓜二つ、そんな気さえしました。農業と現代諸産業、農村と商工業企業、そういう時代の違いはありますが、本質はまったく同じ、そう思います。つまり、京セラフィロソフィは歴史的にも普遍性を持っているということだろうと思います。

報徳仕法と京セラフィロソフィが本質において同じであるということは、両者の普遍性を示している、物心両面の幸福を追求する道に普遍的な法則がある、それがかつては報徳仕法として現れ、今、京セラフィロソフィとして現れている、そういうことだろうと思います。

利を得るに天の理（ことわり）にぴったり合った道がある、豊かになるに正しい道がある、豊かになることは決して悪いことではないが、天の理に照らして人間として正しい道を通して豊かにならなければならない、その道に気づくことこそが一番大切である、そう

いうことを、報徳仕法も京セラフィロソフィも教えてくれていると思います。そういうことに気づきました。

報徳二宮神社のそばに報徳博物館というものがあります。

そこにはいろいろな資料が展示されていて感銘深いですが、そこで1冊の本を見つけました。

武者小路実篤先生の『二宮尊徳』です。昭和5年に書かれたものですが、私が見つけたのは昨年（2010年）1月に復刻されたものでした。読んでみると、素晴らしい本でした。

そこにこうありました。

「彼は人道と天道のことを実によく知り、人間の如何に生くべきかを根本的に知っている。彼のように一生、目的に向かって努力しつくした人は少ないであろう。実によく働きぬいた。また彼ほど、自分の利害から超越して、人々の生命のために働いた人は少ないであろう。彼は捨て身になって人々を助けた。それだけ彼は人々を甘やかさなかった。」

「彼のまいた種でどんな大木が生まれるか、知っているものがあれば彼だけである。彼の望みは救世にあった。その真理にあった。」

「彼」というのは尊徳翁のことですが、読みながら、私には稲盛氏のお名前と二重写しになりました。

尊徳翁の人生にも強い美意識が感じられます。住まいや衣服のことではありません。仕事の美、完ペきを期すという精神の美、生き方の美、徹底して自己を離れ利他に尽くすという生き方の美、そういう美意識です。

稲盛氏にもそれが見られます。

何か不思議な感慨を覚えました。